

# 聖徳太子伝ルーツはキリスト伝

## —キリスト教伝来のインドルートを探る—

ふれあい塾あびこ特別公開講座 2015.7.9 (木)

筑波大学人文社会系教授 平山朝治

### 導入：誕生と受難

「皇后、懷妊開胎 さむとする日に、禁中を 巡行 りまして諸司を 監察 たまふ。馬官 に至りたまひて、乃ち厩の戸に当りて、<sup>なや</sup> 勞 <sup>たちまち</sup> みたまはずして 忽 に産ませり。生れながらに能く <sup>ものい</sup> 言 ひ、<sup>さとり</sup> 聖智 有り。壯 <sup>をとこざかり</sup> に及りて、一 <sup>いた</sup> に十人の訴を聞きて、失 <sup>ひとたび</sup> たず能く 弁 <sup>あやま</sup> へたまひ、兼ねて <sup>わきま</sup> 未然 <sup>ゆくさきのこと</sup> を知ろしめす。」(『日本書紀』推古元年夏四月条、小島ほか校注〔1996〕531 頁、ルビは適宜省略した。以下同様)

と、現存最古の聖徳太子伝記史料である『日本書紀』(720 年)ですでに、超人扱いされている。

厩戸に当って生誕したという伝説は、キリストが馬屋で生まれたという新約聖書ルカ伝の説が、唐で行われていた景教に伴って日本に渡来し、僧徒が太子に付会したものでしょうと推測したのは久米博士〔1903〕であるが、それはあまりにとっぴである。景教の知識が日本に伝わったという徴証は、他に全然見当らぬのであるから、ここにだけその影響を見ることは危険である。(坂本〔1979〕12 頁)

しかし、誕生をめぐる説話のほかにもキリスト伝の影響は読み取れる。

是に山背大兄王等、山より還りて斑鳩寺に入ります。軍将等、即ち兵を以ちて寺を囲む。是に山背大兄王、三輪文屋君をして軍将等に <sup>かた</sup> 謂 らしめて曰はく、「吾、兵を起して入鹿を伐たば、其の勝たむこと <sup>うつな</sup> 定 し。然るに一身の故に由りて、百姓を <sup>やぶりそこな</sup> 傷残 はむことを欲せじ。是を以ちて、吾が一身をば入鹿に賜はむ」とのたまひ、<sup>つひ</sup> 終 に子弟・妃妾と一時に自ら <sup>わな</sup> 経 きて俱に <sup>みう</sup> 死 せましぬ。時に、五色の幡蓋、種々の伎楽、空に <sup>てりひか</sup> 照灼 りて、寺に臨み垂れり。衆人仰ぎ觀、<sup>たたへなげ</sup> 称嘆 きて、遂に入鹿に <sup>さししめ</sup> 指示 す。其の幡蓋等、変りて黒雲に為りぬ。是に由りて、入鹿見ること <sup>あた</sup> 能得 はず。(『日本書紀』皇極二年十一月条、小島ほか校注〔1998〕83 頁)

と、聖徳太子の嫡子・山背大兄王が、百姓を救うために自分(上宮王家)は犠牲になるとしているのは、万人救済のための受難に近く、そのような彼は「山羊の <sup>かましし</sup> 小父 <sup>を</sup>」に喩えられている(小島ほか校注〔1998〕83 頁)。山羊はニホンカモシカのことだが、ウシ科ヤギ亜科である点で羊と同じであり、当時の日本で最も羊に近い種だろうから、「(雄の) 小羊」は「山羊の小父」と訳し得たと思われる。『日本書紀』において、キリストの誕生のみならず受難とも似た内容が聖徳太子・

『日本書紀』は、推古の後継として山背大兄王を推して不穏な動きを見せる境部臣摩理勢を戒めた山背大兄王が聖徳太子の遺言「諸悪莫作、諸善奉行」に触れており（舒明即位前紀、小島ほか校注〔1998〕28頁）、この遺言に従ったものとして、山背大兄王の最期を描いていることになる。この遺言は七仏通誡偈の前半であり、釈迦と同等のあらゆる聖人に共通の、普遍的な教えとして、聖徳太子の遺言ともされていると思われ、当時の日本にキリスト教が伝わり、イエスは諸仏と同等とされていたならば、イエスの言葉ともされえたものであろう。

Serṭo  
Madnḥāyā  
Estrangelā

The opening words of the Gospel of John written in Ser̄tā=西方字体, Madnḥāyā=東方字体 and 'Estrangēlā = 古典字体 (top to bottom) — brēšīṭ iṭaw[hy]-[h]wā melṭā, 'in the beginning was the word'. ([http://en.wikipedia.org/wiki/Syriac\\_alphabet](http://en.wikipedia.org/wiki/Syriac_alphabet))

## インド人キリスト教徒の日本渡来

(4)によれば、ドウヴァーラヴァティーからの一行の頭目であったと思われる、舍衛婦人の夫の名は「乾豆波斯達阿」。「乾豆」＝インド、「達阿」は提婆達多の「達多」と同じくインド人名の末尾。「波斯」はペルシアだが、当時唐では景教を波斯(経)教、その寺院を波斯寺と記していた(『唐

会要』卷四九)。本来遣唐使節だったが漂着したと思われる彼が名乗る「波斯」はペルシアそのものではなく、キリスト教であろう。(4)によれば彼は斉明六年に妻を残して一時帰国したが、その後再来日を果たさなかった。

彼らが日本に伝えたものに、日本最古のコインがある。当時、東南アジア大陸部では、国際通貨として直径約3 cm、重さ約9グラムの銀貨が流通しており（伊東 [2001] を参照）、天智天皇のころに作られた日本最古のコインと材質・直径・重さが一致する。

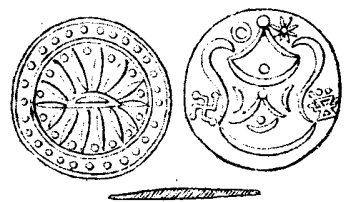


図1 東南アジア大陸部の標準銀貨  
(約 28~33mm 9.2~9.4g)  
出所：Wicks[1992]p.117

遺跡名	直径 (mm)	重量 (g)	銀片 貼付	発見状況	使用法	発掘所見 による時代
①平城京右京三条坊部跡(現奈良市横領町) (国立歴史民俗博物館蔵)	30	10.64	-	明治6年発見 詳細不明		奈良時代?
②飛鳥板蓋宮伝承地(奈良県明日香村)	31.0	8.2	-			8世紀後半?
③川原寺跡(奈良県明日香村)	31.3	(6.99)	-?		地鎮具	7世紀後半
④石神遺跡(奈良県明日香村)	29.1	11.2	+			藤原京期
⑤藤原京左京六条三坊の井戸内(横原市)	25.6	8.5	-	和同開珎27枚と 同開珎調査	祭祀?	奈良時代
⑥平城京右京二条三坊四坪(奈良市菅原町)	30.2	8.96	-			奈良時代?
⑦谷遺跡(奈良県桜井市谷)						不明
⑧飛鳥池遺跡(奈良県明日香村)						不明
⑨眞寶院(大阪市天王寺区)		10.5	?	江戸時代発見約 100枚	埋蔵	不明
(国立歴史民俗博物館蔵)		10.4	+			
⑩船橋遺跡(大阪府相模原市、藤井寺市)	27.6	10.90	+	大和川河床 土坑中から		不明
⑪小倉町別当町遺跡(京都市左京区)	31.5	9.5	-	12枚発見 (うち1枚紛失)		7世紀後半 8世紀初頭
⑫崇福寺跡(滋賀県大津市滋賀里町)	39.1	35.7	-	舍利荘殿		668年ごろ?
	a					
	b		+			
	c		+			
	d	29.1	+			
	e	31.0	+			
	f	31.3	+			
	g	27.8	+			
	h	28.9	+			
	i	29.7	+			
	j	30.2	+			
	k	31.3	+			
⑬唐橋遺跡(滋賀県大津市瀬田)	32.0	9.55	+	橋脚 基礎構造部	祭祀?	7世紀後半?
⑭狐塚遺跡(滋賀県東郷町安養寺)	31.8	(5.3)	+			不明
⑮赤野井湾遺跡(滋賀県守山市赤野井町)	33.2	10.7	-			不明
⑯尼子西遺跡(滋賀県甲良町)	29.9	10.3	-	建物柱穴	地鎮具?	9世紀
⑰北野古墳(三重県鈴鹿市加佐登町)	30.0	9.9	+		副葬品	7世紀後半

表1 机銀貨(無文銀銭)の出土地・重量等  
出所 今村 [2001] 90-1 頁の表1



図2 十字刻印入り机銀貨

左：⑨真宝院出土のc（「データベースれきはく」<https://www.rekihaku.ac.jp/doc/t-db-index.html> で、「館蔵資料（画像付き）」をクリックしてフリーワードに「無文銀銭」を入力した結果のうち、資料番号 H-242-29-3-1）  
右：⑫崇福寺跡出土のe（国立歴史民俗博物館編〔1998〕17頁）

それらにはしばしば十字型の刻印があり、彼らの伝えた銀貨に十字があることは、彼らがクリスチャンであり、「波斯」がキリスト教を意味することの裏付けとなる。

### キリスト教と善光寺

キリスト教は銀貨制度とともに、インド人らが東南アジアから中国を経ずに海路日本に伝え、斉明・天智・天武母子の朝廷に受け入れられたと思われ、この径路は、インドから中国を経ずに百済を経て日本に渡来したとされる善光寺如来を連想させる。

善光寺の寺名は7世紀後半日本にいた百済王家の善光に由来すると思われ、唐・新羅に対抗してドゥヴァーラヴァティー・百済・日本の連合が模索され、660年7月の乾豆波斯達阿一時帰国も百済滅亡記事の直前にあり、中国南部を攻撃するなどの援軍要請を目的としていたと思われる。

乾豆波斯達阿の妻が舎衛婦人と呼ばれるのは、最初の仏像を巡る次のような伝説に因んだものと思われる。

釈尊が祇園に住していたとき、誰にも告げずに三十三天に昇ってそこに再生していた生母摩耶夫人に三ヶ月間説法した。憍賞弥国の優填王と拘薩羅国舎衛城の波斯匿王は行方不明の如来を思慕するあまり病臥した。群臣の建言によって優填王は牛頭栴檀で五尺の仏像を作り、これを聞いた波斯匿王も紫磨金で同じく五尺の像を作った……。 (384-5年に漢訳された『増一阿含経』巻二八〔大正二〕、要旨は高田〔1967〕10-1頁による)

つまり、乾豆波斯達阿は、そのなかにある「波斯」によって、黄金の仏像を作った波斯匿王と関連づけられて拘薩羅国舎衛城のあたりの人とみなされ、妻もその地名によって舎衛婦人と呼ばれたとみることができる。

最初の仏像は『増一阿含経』によれば五尺であるが、645年に帰唐した玄奘が将来した、優填王の像に擬した刻檀仏像は、「光座を通じて高さ尺有五寸」（『大唐西域記』巻一二、大正五一、読み下し文は高田〔1967〕一六頁）である。また、およそAD300年前後の作と考えられるガンダーラ彫刻において、優填王が手に捧持して仏に示している仏像も一尺五寸程度の小像である（図3）。

このように最初の仏像は善光寺本尊と同じく像高一尺五寸（約四五センチメートル）程度とする所伝もあり、玄奘を介して7世紀後半の日本に伝わっていたとしても不思議ではない。玄奘のもとに留学し、西域で梨をくれた僧の生まれ変わりだとして玄奘に可愛がられた道照（『続日本紀』文武天皇四年三月十日卒伝、青木ほか校注〔1989〕23頁）は、玄奘からインドや西域について聞いていたので、日本に来たインド人とも親しくなり、善光寺信仰形成にも関与したと思われる。「吐火羅」「靺鞨」は中国史書では中央アジア内陸部のトハリスタンで、玄奘の『大唐西域記』に



図3 優填王の仏像 ガンダーラ  
出所：高田〔1987〕4頁図0-1

登場する。道照は東南アジアのドゥヴァーラヴァティーを西域のトハーリスタンととりちがえていたようだ。

以上より、善光寺如来像は、世界最初の仏像のひとつと信じられていた、舎衛城の波斯匿王が作ったという黄金の仏像に因んで作られたものであり、そのため、日本最古の仏像と混同されて仏教公伝と付会され（欽明紀十三年十月条によればそのときの仏像は「釈迦仏金銅像一軀」なので、善光寺本尊をそうだとする寺伝は誤り）、黄金も憍賞弥国の優填王の像の素材とされる栴檀と兼ねた名「閻浮檀金」で呼ばれるに至ったものと思われ、その製作にインド人夫婦、夫が帰国した後とすれば婦人が少なからぬ貢献をしたことも、婦人が舎衛を冠して呼ばれることから読みとれる。

銀貨の単位呼称「杣」は、滅多に使われない漢字なので特殊な意味が込められていると思われる。「梵」には「梵字」のようにインドの含意があり、「梵」の林冠の二つの「木」のうち一つを除いたものが「杣」であると解せる。だとすれば、ドゥヴァーラヴァティーから来日したインド人二人のうち日本に残った舎衛婦人に因んで「杣」字が使われたことになる。

新約外伝の『トマス行伝』（日本聖書学研究所編 [1976] 所収、荒井・柴田訳）によれば、インドにキリスト教を伝えたのは使徒トマスとされ、トマスとイエス・キリストは双子で、2人は外見では区別できず、2人が1組となって人々を救う（31, 39 など）。したがって、阿弥陀浄土教は本来、イエス・トマスという双子の兄弟とその母マリアを慕うインドのキリスト教徒たちが仏教と習合しつつ生み出し、阿弥陀如来と観世音・大勢至両脇侍菩薩の三尊も、聖母マリアとその双子の兄弟のイメージから生まれたと思われる。『トマス行伝』50の聖餐においてトマスが呼びかけている女性単数形の対象は、「双子の若者を生む／聖なる鳩よ、／隠された母よ、来たりませ。」とあることから、イエスとトマスの母マリアである。この聖餐は聖母マリアが中心となり、双子がその脇に控えるような信仰形態を示しており、阿弥陀如来と両脇侍菩薩の三尊に通じる。善光寺の鳩字扁額にみられるような鳩信仰もこれに由来か？

聖餐における呼びかけの対象と阿弥陀仏国土名「スカーヴァティー」（鳩摩羅什漢訳では「極楽」、岩本 [1965] 111-9 頁によれば『創世記』に登場する「エデンの園」の「エデン」〔快楽を意味するアラム語〕の訳語）が共に女性形であることは、この聖餐と阿弥陀信仰とが同源であることを示唆する。さらに、『トマス行伝』において、イエスが「多くの姿を有するおかた」（48）とされるのは、『法華経普門品』が説く観世音菩薩の三十三身に通じる。

阿弥陀の語源としても、ティグリス河遡航終点の西岸に位置する、トルコ東部の都市ディアルバクルのローマ時代の呼称「アミダ」（Amida）を挙げることができる。ティグリス・ユーフラテス河の源流域がエデンの園とされており、アミダはその入口にあたる。アミダにある最古の教会は、西紀前からある異教寺院に由来する聖母マリア教会であり、そこにはトマスの遺骨がある（<http://en.wikipedia.org/wiki/Diyarbakır> を参照）。トマスはアミダの母の許を安息の地としたのであるから、「アミダ」という語は聖母マリアを意味する言葉と受け取られたと思われる。アミダのアラビア語名“Diarbekir”の意味は“Land of the Virgin”（Pétridès [1907]）、それに相当するアラム語“Dayr Bekir”の意味は、最初の教会あるいは処女（＝マリア）の教会であり（<http://de.wikipedia.org/wiki/Diyarbakır> を参照）、現在のトルコ語地名 Diyarbakır に受け継がれているように、アミダ＝マリア教会である。アミダ如来が男性であるのも、変成男子で説明できる。

(5)には、「舎衛女・墮羅（＝ドゥヴァーラヴァティー）女・百済王善光」とあり、善光寺を開いた、百済聖明王の転生・本田善光とは百済王善光にほかならず、彼女たちとともに善光寺信仰の基礎を固める役目を負っていたのではなかろうか。おそらく舎衛女性は開山三卿の一人、善光の妻とされる弥生であり、(3)が三月であることと符合する。(4)の夫が帰らなかったため、舎衛婦人は百済王善光と再婚したのであろうか？

本堂が古くは十字型であったことから善光寺にキリスト教の影響が顕著であることがわかる。



図4 聖戒編『一遍聖絵』京都市・歓喜光寺所蔵、善光寺（1299年ころ）

長野県編〔1986〕口絵

善光寺の開山御三卿として、善光、弥生と彼らの息子善佐の三人が祀られている。死後生き返れることになった善佐が地獄で皇極（＝斉明）女帝に出会い、自分が代わりに地獄にとどまるので女帝を生き返らせるよう申し出て、いっしょに復活するという『善光寺縁起』（続群書類従第二十八輯上 釈家部 卷第八百十四）卷第三の話は、彼が贖罪と復活の救い主キリストを象徴する存在であることを証している。『善光寺縁起』卷第一で如是姫が蘇生した際に「棺に納めて山林に送り捨てし死人も速に蘇生して、棺蓋を除き、端座して如来を拝し奉る」と、死人が大勢棺から復活する様は、イエスの復活とともに多くの聖徒たちの死体が生き返って墓から出てきたという『マタイ福音書』（二七・五〇～三）を連想させる。インド的な輪廻転生思想のもとでは死体が墓から出てくるという再生・復活の発想は生まれ難く、インドよりも西方（おそらくエジプトのミイラ信仰）に起源のある復活思想の影響を受けた表現であり、善佐はイエスそのものと言うべきである。

『トマス行伝』には、殺されたインドの少女が地獄（冥府）でキリストに救われて蘇生する話があり（五五～七）、『善光寺縁起』の斉明女帝と善佐の話とよく似ている。「冥府降りはシリア系のキリスト論にとって基本的要素を成している。たとえば『ソロモンの頌歌』、マニ教、マンダ教の文書、アフラハトなどに認められる」（日本聖書学研究所編〔1976〕465頁）と訳注で指摘されている。シリア系である古代インドのキリスト教も地獄でキリストに救われて蘇生するという話を重視していたと思われ、それが日本においては斉明女帝と善佐の話となっただろうことから、善佐＝イエスと思われる。

本田善光の子孫とされる中衆に伝承されてきた、善光寺最大の秘儀である一二月二の申の日の夜に行われる御越年式（五来〔1988〕137-43頁）は、「善光寺様の御年取」とされているので、善光

寺本尊の誕生日を意味する。「<sup>シニチ</sup>申日」と「<sup>シニチ</sup>四日」は類似音で通じるとすれば、二の申の日は一三～二四日になることとあわせて、「一二月の二の申の夜」とは「一二月二四日夜」すなわちクリスマス・イヴの意味と解釈できる。御越年式が善佐生誕を祝うものである根拠としては、善佐の別名が「作留」(＝「猿」「申」)である(『善光寺縁起』巻第四「奉供養檀越交名次第事」、坂井[1969] 79 頁)ことを挙げ得る。以上より、御越年式とはイエス＝善佐生誕を祝うクリスマス・イヴであると思われる。

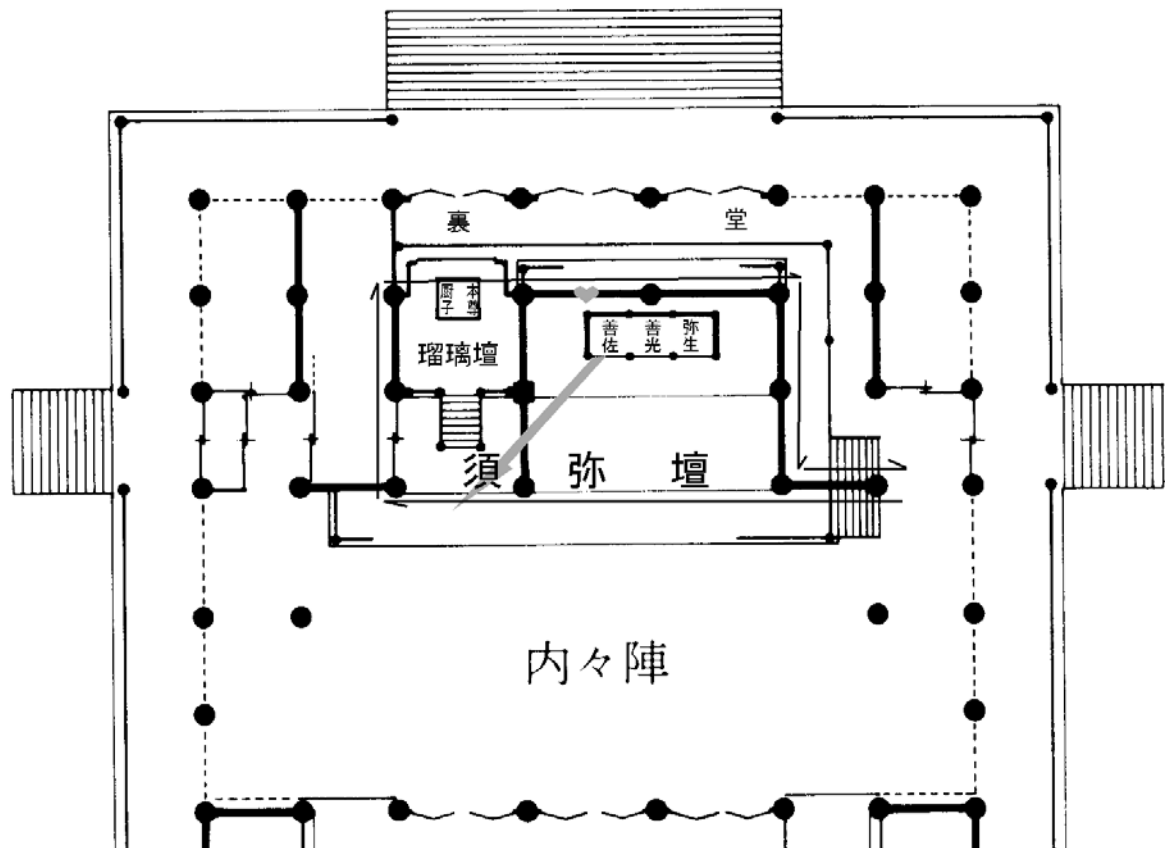


図5 善光寺本堂内々陣以北の平面図

出所：長野県編[1990] 121 頁図1 (「内々陣」以外の活字と矢印を加筆)



図6 善光寺の一光三尊(御前立本尊)と開山三卿

出所：左 善光寺事務局監修[2000] 口絵

右 文化財建造物保存技術協会編[1999] 口絵5 頁下

また、正月七日の御印文加持の際、堂童子は本尊前で「弥陀、観音、勢至の三尊に三度づつ御印文を捺す。続いて三卿前に至って善光、弥生の前に同様三度捺すが、善佐へは捺することがない」（『善光寺鏡善坊ホームページ』<http://w1.avis.ne.jp/~wakaomi/doudouji.html>、強調引用者）ことも、本堂内々陣中央の善佐が、秘仏一光三尊像より格上の、真の救い主であり、御印文を捺す堂童子は善佐を体現していると解するほかならう。

七年に一度（六年周期）の前立本尊開帳は、秘仏本尊を安置する瑠璃壇の前ではなく、三卿の間の左より、すなわち善佐像前で行われる。瑠璃壇前で本尊に焼香する平常時は、斜め右前に真の本尊があるということに気付かない人たちも、開帳のときには、その奥の善佐像の方に向かって、前立本尊を拝むことによって、平常時よりも真の本尊に近づけるのであり、瑠璃壇上の厨子内秘仏ではなく前立のご開帳を挙げる意味があるのだ。

暗黒のなかで極楽の錠前に触れて本尊と結縁するという戒壇巡りにおいて、極楽の錠前は「瑠璃壇の下」（五来〔1988〕16 頁）「本尊の真下」（信越放送〔2003〕）にあるとされているが、腰のあたりの高さの右手で壁に触れながら歩くので、円柱や歩数でどのあたりにいるかを確認しながら巡ることができ（図5の実線矢印）、瑠璃壇の本尊厨子の直下を通るにもかかわらず、極楽の錠前はそこにはなく、ちょうど本堂の南北中央線上、すなわち善佐像のほぼ後方（♥）にあることを私は確かめた。このことから、善光寺の救い主たる秘仏本尊は、瑠璃壇上厨子内の秘仏というよりむしろ、本堂中央に位置する善佐像だということが裏付けられる。三卿の間と瑠璃壇とを仕切る板壁には「影向窓」と呼ばれる小窓がある。「影向」とは、神仏が姿を現すことであり、瑠璃壇前で焼香参拝するとき、窓を通して三卿の間の善佐が見える（灰色矢印）のであるから、善佐像が秘せられた本尊をあらわしているということが、裏付けられる。

極楽の錠前は、イエスが「あなたたちは、私を誰だと言うのか」と問うたのに対して「あなたこそキリスト、活ける神の子です」と答えたペテロが天国の鍵を与えられ、「その後、彼は、自分がキリストであることを誰にも話さないように、弟子たちに命令した」という『マタイ福音書』（16:15-17:19）をふまえていると思われる。キリスト教由来のものを表向きは隠して仏教寺院として善光寺信仰が作られたときに、「誰にも話さないように」というイエスの命に触発されて善佐＝キリスト像の下の暗闇に極楽の錠前を置くというアイディアが生まれたのではなかろうか？

影向窓の北側に、「<sup>もりやばしら</sup>守屋柱」と呼ばれる、本堂で唯一の四角い柱がある。五来は、守屋柱を物部守屋の首を埋めた上に立つ柱とする寺伝を否定したうえで、屋を守る大黒柱の意味と解している（五来〔1988〕46-8 頁）が、寺院の柱はエンタシスから天平時代には円筒型柱、平安時代には角柱になっているので、その他は円筒型柱からなる天平風の善光寺本堂において一本だけある角柱は建物を支える柱ではなく、十字架の立柱だと思われ、図5の灰色矢印のように、影向窓の向こうの善佐は十字架上のキリストを表わす。罪を負って死んだ者の血を吸った柱という点で守屋の首の上に立つとされる柱は贖罪十字架にふさわしい。

善光寺信仰形成にかかわったと思われる道照は、玄奘から「経論は深妙にして、究竟すること能はず。如かじ、禪を学びて東土に流伝せしめむには」（文武四年三月十日卒伝、青木ほか校注〔一九八九〕二三頁）と言われて禪を学んでいたもので、仮にインド人らの宗教が唐にも伝えられていたキリスト教であって仏教ではないということに気付いていたとしても、仏教とキリスト教との間の、文字に書かれた教えの相違にこだわらなかったのかもしれない。『日本書紀』において厩戸皇子の薨日が二月五日とされたのは、玄奘の薨日に倣ったものである（大山〔一九九八〕二九九頁）。しかし、唐で景教に触れて帰国した彼より若い僧たち（その急先鋒はおそらく道慈）は、善光寺信仰

にみられるキリスト教的な要素を問題にし、弾圧したため、信濃の地に本尊を移転せざるを得なくなり、隠れキリシタンの工夫を随所に凝らした善光寺本堂が作られたのであろう。

## とかなくてしす

大山〔1999〕〔2001〕は、政変で死んだ長屋王の怨霊を封じるために、光明皇后らによって聖徳太子信仰が形成されたとする。大山は、『日本書紀』の聖徳太子像は中国的聖天子像とするが、中国では「聖徳」が天子たることを正当化するのに対して、『日本書紀』は天子となってもよいのにならない徳を「聖徳」としている。『日本書紀』における「聖徳」の用例は、次の四つである。①②は兄の億計王（仁賢）が弟の弘計王（顕宗）を即位させる際のもので、③④は聖徳太子である。

①②大臣・大連等奏して言<sup>まう</sup>さく、「皇太子億計、聖徳明茂にして、天下を譲り奉<sup>まつ</sup>りたまふ。陛下、正統にまします。鴻緒<sup>う</sup>を奉<sup>う</sup>けて、郊廟の主と為り、祖の無窮の列を承統し、上は天の心に当り、下は民の望に厭<sup>かな</sup>ひたまふべし。而るに肯<sup>あ</sup>えて踐祚したまはず。遂に金銀の蕃国をして、群僚遠近望を失はずといふこと莫<sup>いよいよさかり</sup>からしめむ。天命、属<sup>はなは</sup>くこと有り。皇太子、推譲したまふ。聖徳、弥盛<sup>あきら</sup>にして、福祚孔<sup>あきら</sup>だ章かなり。在孺にして勤めたまひ、謙恭慈順なり。兄の命を奉け、大業を承統したまへ」とまをす。

（顕宗元年正月朔、小島ほか校注〔1998〕240-1頁。）

③詔して豊御食炊屋姫尊<sup>とよみけかしきやひめのみこと</sup>を立てて皇后とす。是、二男五女を生みたまふ。其の一を菟道貝鮪皇女<sup>うぢのかひたこのひめのみこと</sup>と曰し、更の名は、菟道磯津貝皇女なり。是東宮聖徳に嫁す。（敏達五年三月十日条、小島ほか校注〔1998〕474-5頁）

④穴穗部間人皇女を立てて皇后とす。是四男を生みたまふ。其の一を厩戸皇子と曰す。更<sup>また</sup>の名は豊耳聡聖徳。或いは豊聡耳法大王と名く。或いは法主王と云ふ。是の皇子、初め上宮に居しまし、後に斑鳩に移りたまふ。豊御食炊屋姫天皇の世に、東宮に<sup>まし</sup>位居し、万機を総摂して、天皇事したまふ。語は豊御食炊屋姫天皇の紀に見ゆ。（用明元年正月朔、小島ほか校注〔1998〕500-1頁）

「聖徳」とは、天子たるにふさわしい徳を備えている（中国的意味）だけでなく、それにもかかわらず天子とならないような、中国的な聖徳よりも高次の徳、という意味である。『日本書紀』において、実名に「皇子尊」との尊称を添えられているのは草壁のみであるのに対して、「皇子命」とあるのは、厩戸皇子と高市皇子のそれぞれ一例、合計二例のみであり、天武・持統直系で踐祚を予定されていた草壁皇子に次ぐ存在として厩戸皇子と高市皇子が他の皇子と区別されているのは、いずれも聖徳を備え、即位しなかったとみなされていることになるからである。天武の最年長の皇子で、自らは即位せず、太政大臣として持統女帝を支えた高市皇子と重ね合わせつつ摂政として推古女帝を支えた厩戸皇子の聖徳を称えていたことを意味し、聖徳太子聖化の創始者は高市皇子の長男長屋王と思われる。

墓のなかに屍がなかった（道教の尸解仙）という『日本書紀』聖徳太子伝の話の地である、図7のA片岡山とB吉備内親王の墓は正確に南北線上にあり、ABを底辺、C法隆寺を頂点とする二等辺三角形を描くことができ、長屋王の墓はBとCを結ぶ線上にある。このような位置関係は、長屋

王家の人々の冥福を祈る拠り所として山背大兄王一家最期の地・法隆寺を位置づけたものと思われる。長屋王は利他的自己犠牲（山背大兄王）と尸解仙を巡る信仰を『日本書紀』に記させていたのであり、聖徳太子を父・高市皇子と重ね合わせていたとすれば、山背大兄王は長屋王自身に擬えられることになる。長屋王は死に臨んで明白にそのような認識に至っていたと思われ、長娥子所生子たちに伝えられたのであろう。長屋王家滅亡後、長娥子との間の子らが高市皇子・長屋王を聖徳太子・山背大兄王に擬えて法隆寺で祀るようになり、不比等の三女

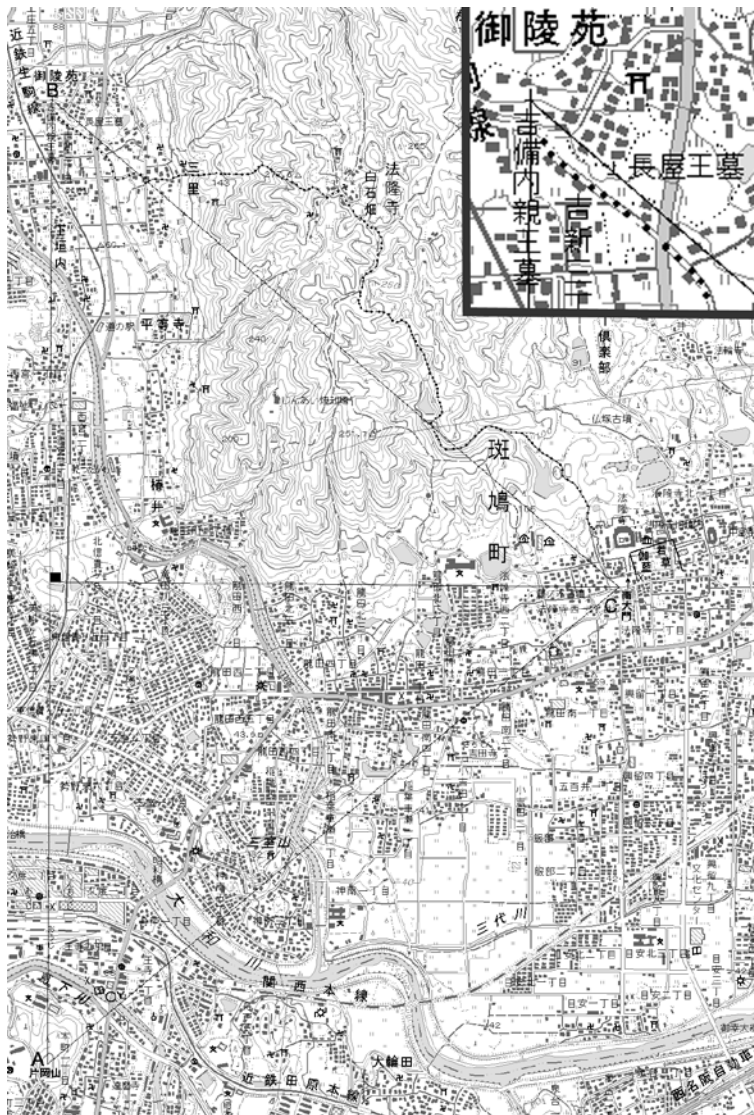


図7 長屋王・吉備内親王墓、法隆寺と片岡山の位置関係  
国土地理院 地図閲覧サービス（試験公開）  
[<http://watchizu.gsi.go.jp/>] 2万5千分1地形図、信貴山[北東][南東]より著者作成（右上は長屋王・吉備内親王墓およびその近辺の拡大）

で彼らのオバにあたる光明皇后もそれに加わったと思われる。



図8 吉備内親王墓前より  
長屋王墓・法隆寺方面  
著者撮影



図9 吉備内親王墓前より  
片岡山方面  
著者撮影

法隆寺の北西から山道をつたって長屋王・吉備内親王墓に行くことができる（図7）。法隆寺北西隅にある西院には、天平時代後半に作られた峰の薬師と呼ばれる我が国最大級の乾漆像を安置する西円堂があり、救世観音を安置する東院の夢殿＝東円堂とともに八角円堂である。興福寺北円堂は元明・元正が長屋王に命じて作らせ、藤原不比等一周忌の七二一（養老五）年忌日に完成し（『校刊美術史料 寺院編 上巻』所収『護国寺本 諸寺縁起集』、『大日本仏教全書 興福寺叢書 第一』所収『興福寺流記』）、不比等の菩提を弔うものであるように、奈良時代の八角円堂は死者供養のためのものとされ、その建立を長屋王が受け持っていた。したがって、長屋王の菩提を弔うために八角円堂を建立しようというのは、自然な発想であり、西円堂は山の向こうにある長屋王・吉備内親王の墓と直接結びつく。七七日の中陰供養の本尊は薬師如来であるし、長屋王が願主となって文武の菩提を弔うために写経させた和銅経は薬師寺に施入されたと考えられる（鈴木〔1996〕130-1頁）。さらに、吉備内親王が721=養老5年に崩じた母・元明の冥福を祈って養老年中に薬師寺東院を建立したと伝えられている（『護国寺本 諸寺縁起集』所引流記）。『校刊美術史料 寺院編 上巻』所収『諸寺建立次第』には「東院長屋親王建立也」とあり、いずれにせよ夫妻の少なくとも一方が建立したと伝えられていることになる。このように、長屋王・吉備内親王夫妻にとって薬師如来は死者供養の本尊であり、峰の薬師は彼らのために作られたと思われる。

長屋王に対する告発が誣告であると正史の『続日本紀』天平十年七月十日に明記されているように、長屋王は冤罪で殺されたと公認された。長屋王の変（729=神亀6年2月12日）の根本的な原因として、727=神亀4年閏9月29日に、聖武を父、光明子を母として誕生し、同年11月2日には皇太子となった某王（基王）が、翌年9月13日に亡くなったことが挙げられてきた。従来通説とされてきたのは、以下のような岸俊男「光明立後の史的意義」（岸〔1966〕V）の説である（寺崎〔1999〕251-2頁を参照）。某王が亡くなった年に聖武と県犬養刀自との間に男子（安積親王）がうまれたため、藤原氏は安積親王の即位を回避し、光明子との間にふたたび男子が誕生するのを待つための手段として、光明立后を実現しようとし、そのための障害になると予想された長屋王を陥れたというものである。岸説は、長屋王の変という原因と光明立后という結果とをふまえて、武智麻呂らが結果を得るための手段として長屋王の変を引き起こしたと考えるのであり、この説を採れば、光明子自身もグルではないかという嫌疑がかかってくる。

しかし、この説は誤っていると思われる。のちの天皇と違って当時は幼帝が登場しえるはずもなかった。文武は持統の後見のもとで15歳で立太子・即位し、聖武は14歳で立太子したが、24歳でようやく即位している。したがって、安積親王即位は、15～24歳くらいまでは引き延ばせるのである。

それまでの間に、聖武にもしものことがあったとしても、斉明重祚の前例があるので元正上皇が重祚することで切り抜けられる。また、広刀自と贈太政大臣不比等の子光明子では父親の格があまりに違うので、安積親王より年少でも光明子の男子が皇位継承において優先されるのも自明のことであろう。もし光明子が男子に恵まれなかったとしても、安積親王に藤原氏の娘を娶せることもできる。したがって、某王薨去の時点で藤原氏にとって安積親王対策を講ずる必要は全くなかったのである。

そこで、考えるべきことは、某王が亡くなった時点で皇位継承候補としてクローズアップされたのは、安積親王以外の皇族ではないかということであり、この点について説得的な議論を展開したのが、河内〔1986〕85頁である。長屋王は元正女帝の同父母妹・吉備内親王を妻としており、長

屋王やその子息が藤原氏に危険視され、抹殺されたというのである。

この説にも難点がある。某王も安積親王も生まれる以前から、長屋王やその子息は藤原氏にとって同様に危険な存在であったはずであるし、某王薨去ののちも、光明子が男子を生む可能性がある以上、某王出生以前と基本的に状況は変わらない。だから、某王薨去直後にわかに、藤原氏にとって長屋王やその子息が危険な存在と意識されるに至った何らかの事情が存在したとしか考えようがない。

ここで重要なのは、聖武と光明子の間に、718=養老 2 年に生まれた阿倍内親王（のちの孝謙・称徳女帝）が、長屋王の変のときには数え年で 12 歳になっており、彼女の婿の候補が挙げられはじめても不思議がないことである。その場合、血筋においてできる限り劣らない年上の男性が望ましいはずなので、長屋王の子息のうち、阿倍より年長の者が候補となったはずである。724=神亀年 2 月 22 日に膳夫王が無位から従四位下に叙されており、阿倍内親王の婿は彼以外に考えられないということは、そのころから誰の眼にも明らかであったと思われる。

某王が薨去した段階においては、聖武も光明子も、若い二人が結婚して子供ができれば、その孫に皇統を伝えたいと考えはじめるのが自然のなりゆきであるから、膳夫王は聖武直系に入り婿することになったと思われる。すなわち、二人の結婚と膳夫王の立太子が、皇太子某王の死後にわかに現実味を帯びてきたと思われる。そうなることを嫌った武智麻呂らが、若い二人の結婚を阻止するため、長屋王に無実の罪を着せて長屋王・吉備内親王とその間の男子を抹殺したのではなかろうか。

また、思春期を迎えつつあった阿倍内親王が、おそらく婚約を内定されていた膳夫王ら長屋王一家を失ったことから受けた精神的ショックも計り知れない。したがって、兄・外オジたちの罪の赦しを請うために、光明皇后と阿倍内親王の母娘はいわば一体となって、聖徳太子信仰へと傾倒していったものと思われる。このことは次の史料によっても裏付けられる。

天平七年歳在乙亥十二月廿日、春宮坊奉聖徳尊霊及今見天朝、講誦法華經……（「法隆寺東院縁起」『大日本仏教全書 第一一七冊 寺誌叢書第一』）

春宮坊とは当時まだ立太子していなかった阿倍内親王のことであり、「法隆寺東院縁起」によれば、その後 739=天平 11 年 4 月 10 日、阿倍は藤原房前に命じて東院をつくった。房前から藤原四兄弟は 737=天平 9 年に豌豆瘡（天然痘）で相次いで亡くなっており、四兄弟のうち房前は、史料からは長屋王の変に関与した形跡はなく、長屋王と親密だったとの説もある（寺崎 [1999] 249 頁）。そんな彼が死んでいるはずなのに東院を建てたとされている。長屋王の変に直接関与しなかった光明皇后・阿倍内親王・藤原房前が、この時期の聖徳太子信仰の発展を担ったのであろう。

阿倍内親王の存在を考慮にいと、天寿国繡帳にも新たな光を投げかけることができる。繡帳銘によれば、聖徳太子妃の多至波奈大女郎が太子の往生した天寿国の様子を見たいと訴えたため、推古天皇が采女などに命じて繡帷二張を作らせたとある。聖徳太子妃多至波奈大女郎とは、実は橘三千代の孫の阿倍内親王であり、彼女にとっての聖徳太子とは婚約者膳夫王であり、亡き婚約者への彼女の思いが天寿国繡帳には込められているのだろうと。

752=天平勝宝 4 年の大仏開眼供養前にはじめて東大寺二月堂で行われたお水取りの日である旧暦 2 月 12 日は長屋王らの忌日そのものであり、それは死水を取ることに由来していると解釈できる（Maccallister [2011]）。罪を悔い人々の幸福を祈るという十一面悔過を行う修二会の大小二つの

十一面観音は2月12日に亡くなった長屋王・吉備内親王夫妻とその子らを象徴しているのでは？  
キリスト受難と信仰による救済→上宮王家滅亡→長屋王家滅亡

735年8月に太宰府から天然痘の流行がはじまり、藤原四兄弟が相次いで死んだ直後の737=天平9年10月20日に長屋王の遺児に限って異例の叙位が行われているのは天然痘流行を長屋王の崇りと恐れたものだという説（寺崎[1991][1999]260-1頁）は、後に確立した怨霊信仰を遡って適用している。しかし、非業の死を遂げた人が崇るという発想があったとすれば、長屋王の変後、悲劇の場である旧長屋王宅に皇后宮を置いて光明皇后が住む（奈良国立文化財研究所[1995]512頁）ということは理解しがたい。長屋王が政権を担っていた時期の一貫した特色として儒教的な災異思想が挙げられており（川崎[1982]133-5頁）、天然痘が流行して藤原四兄弟が死んだことも、災異説によって彼らの悪政に対する天の怒りとされただろう。宇合の長男である藤原広嗣は左遷されたが、災異の元凶は吉備真備と玄昉だと上表した（『続日本紀』天平十二年八月二十九日条）。このように、災異を引き起こした責任の擦り合いとして権力闘争が起こったことも、疫病が災異思想によって理解されていたことを裏書きする。また、仏教の因果応報説によって長屋王を無実の罪で陥れたため彼らは疫病に倒れたともみなされるようになっただろう。

『日本霊異記』中巻の「己が高徳を<sup>たの</sup>待<sup>せんぎやう</sup>み、<sup>しや</sup>賤形<sup>み</sup>の沙弥<sup>う</sup>を刑<sup>お</sup>ちて、以て現に悪死を得し縁 第一」は、死を決意する際の長屋王について「親王自ら<sup>おも</sup>念へらく、『罪<sup>トラ</sup>无くして囚執ハル……』」（中田訳注[1995]119頁）と記している。因果応報で長屋王を貶める説と冤罪説とがそこには共存しており、当初は冤罪の疑いに抗して仏教の因果応報説で長屋王の死が正当化され、やがて冤罪が公認されるようになったことを反映していると思われる。

長屋王の無実を示唆すべく叙位が行われたのは、身代わりとして天罰を引き受けて死に、災異や革命からこの世界と皇統を守る存在として信仰されはじめたことを示唆する。山背大兄王はのちの怨霊のように民百姓まで苦しめる災異を起こすのとは正反対に、百姓を救うために犠牲となったと『日本書紀』は伝えているのであり、入鹿の悪政が天の譴責としての災異を招くことを避けるべく天に命を捧げたとも解釈できる。おそらくそのような解釈のもとで山背大兄王一家と長屋王一家とを重ね合わせ、天の怒りを宥めて災異から守ってくれるよう、聖徳太子信仰が長屋王の遺児や光明皇后・阿倍内親王らを中心に整備されたものと思われる。また、東大寺でも二月堂十一面観音と重ね合わされて祀られたと思われる。

平安初期には非業の死を遂げた人の復讐や疫病災害を恐れる怨霊・御霊信仰が成立したが、御霊とされるのは本来、冤罪で殺された（自殺、配流や左遷と衰弱死も含む）とされる貴人だった。

廿日壬午。於神泉苑修御霊会。勅遣左近衛中将従四位下藤原朝臣基経。右近衛権中将従四位下兼行内蔵頭藤原朝臣常行等。監会事。王公卿士趣集共觀。靈座六前設施几筵。盛陳花果。恭敬薰修。延律師慧達為講師。演說金光明經一部。般若心經六卷。命雅樂寮伶人作樂。以帝近侍兒童及良家稚子為舞人。大唐高麗更出而舞。雜伎散樂競尽其能。此日宣旨。開苑四門。聽都邑人出入縱觀。所謂御霊者。崇道天皇。伊予親王。藤原夫人。及觀察使。橘逸勢。文室宮田麻呂等是也。**並坐事被誅。冤魂成厲。**近代以来。疫病繁発。死亡甚衆。天下以為。此災。御霊之所生也。始自京畿。爰及外国。每至夏天秋節。修御霊会。（『日本三代実録』貞觀5=863年5月20日）

明らかに冤罪でない怨霊（平将門、崇徳上皇など）は、祟りを封じるために祀っても救い主として信仰されないのでは？ だとすれば、恨みを抱いて死んだということよりも、罪なくして死んだ

という代受苦によって人々を罪苦から救うという契機が重要と思われる。

いろは歌「以呂波耳本へ**止**／千利奴流乎和**加**／餘多連曾津祢**那**／良牟有為能於**久**／耶万計不已衣**天**／阿佐伎喻女美**之**／恵比毛勢**須**」(『金光明最勝王經音義』)の折句「とかなくてしす」は意図的な暗号とする説が古来流布しており、竹田出雲作『仮名手本忠臣蔵』のタイトルは四十七士がとがなくて幕府の審判を従順に受け入れて死んだという意味だということは1748年の初演当時常識になっていた(小松[2009]55頁)。曾我物狂言が正月に演じられるのも、曾我兄弟を祀ると加護が得られるからであり、江戸時代の庶民の娯楽である歌舞伎にも冤罪で死んだ人を祀れば幸福が得られるという信仰が浸透していた。曾我兄弟や四十七士が怨霊として恐れられることがないのは、無垢の正義の士として讃えることと両立しないからでは？ キリストや山背大兄王・長屋王が怨念ゆえに崇ると恐れられないのと同様では？ 菅原道真が当初は怨霊として恐れられ、のちに天神として崇信されたのは、しだいに道真の人格的高潔さが称えられるようになったことを反映しているのでは？

### 彼岸会と秘仏の淵源

日本仏教特有の行事とされる春秋分七日間の彼岸会は、八〇六(大同元)年三月一七日に、崇道天皇(＝相良親王：桓武天皇の同父母弟、藤原種継暗殺に関与したとして廃太子、無実を訴えて絶食、淡路に配流される途中に憤死し、天皇号を追増される)のために春秋二仲月(2月と8月)の七日間諸国国分寺の僧に金剛般若経を読ませるよう、桓武が命じて崩じた(『日本後紀』同日条)ことにはじまるが、聖徳太子信仰にキリスト教が影響しているので、小羊の血によって神の祟りを避けたことを記念する過越祭が、ユダヤ教の第一月であるニサンの月の一四日夕方(夕方から一日のはじまるユダヤ暦では一五日のはじまり、春分後最初の満月の出るところ)から二一日夕方までの七日間、種なし(無発酵)パンを食べて祝われる(『出エジプト記』一二ノ一四～二〇)ことや、それに因むキリスト教の受難週(聖週間)に由来し、種なしパンはぼたもちになったと推測できる。

過越祭のちょうど半年前と後、ユダヤ教第七月の一五日から七日間は仮庵祭であり、『民数記』第二八～九章によれば最大規模の供犠が捧げられる(旧約聖書翻訳委員会訳[2004]補注9頁、「仮庵祭」の項を参照)。『ヨハネ福音書』第七章は、仮庵祭の半ばにイエスが神殿にのぼって教えはじめ、祭司長たちやファリサイ派の人々がイエスに殺意を抱いて逮捕しようとし、祭りの最終日にイエスが活ける水について語ったと述べ、仮庵祭での出来事を過越祭における受難や贖罪の前触れと位置付けているように、キリスト教においても仮庵祭は受難週に準じるものとされている。

この世の現実たる此岸から脱出し、理想境たる彼岸を目指すという宗教的意味付けが彼岸会にはあるが、過越祭と仮庵祭はいずれもエクソダス・出エジプトに因んだものとされており、エクソダスは出発点から、彼岸は目的地から、同じことを表現しているのも、日本の彼岸会が過越祭と仮庵祭の影響を受けていることの証になろう。

過越やキリスト受難の月はニサンと呼ばれ、旧暦の仲春二月(ニの月)にほぼ対応することから、ニサンに相当する表現として、「二(ニ)」が三(サン)個含まれる二月二二日が特別視された可能性がある。長屋王の忌日がそのちょうど十日前の二月一二日であることは、二月二二日を受難日に当てる発想を強めたかもしれない。2月22日に膳夫王が無位から従四位下に叙されているのは、阿部内親王との婚約の成立を意味していたかもしれない。このようにして、ニサンの月の受難日といった意味合いが、聖徳太子の忌日二月二二日には込められたのではなかろうか。

日本仏教に特有なものとして、怨霊信仰、彼岸会のほかに、秘仏信仰も挙げられる。善光寺如来、東大寺二月堂本尊の大小十一面観音や法隆寺夢殿の救世観音はその典型であり、聖書によって偶像が禁じられていたことと仏像製作との矛盾を回避する処置とも思われる。しかし、大秦景教流行中国碑には、経像がもたらされ、皇帝の写真（肖像画）を寺壁に掲げたとあり、ソグディアナ・トルファン・敦煌でネストリウス派の聖像が発見されており（Gillman and Klimkeit [1999] Plate 19-25, 28-9）、シルクロード・中国のネストリウス派に偶像忌避は希薄であるから、キリスト教が中国から伝えられたならば、仏像崇拜は問題とならなかっただろう。杣銀貨には天皇像も神像もみられず、十字印が多いのは、西南インドのネストリウス派が十字以外の<sup>イメージ</sup>形象をあまり用いず、偶像崇拜を排除する傾向が強い（スチュアート[一九七九]一五一頁、Gillman and Klimkeit [1999] pp.174, 183）ことにも符合する。

秘仏を拝む際には、本来の像姿を想像するとは限らず、十一面観音の場合には複数の人の顔を思い浮かべつつ拝むこともできる。したがって、長屋王一家を大小十一面観音になぞらえるために、秘仏は効果的だったと思われる。

善光寺巡礼・戒壇巡廻はメッカ巡礼・カアバ神殿巡廻に似ており、いずれも、神仏像を見えなくしたこの世の直方体至聖所を巡る宗教行動である。古来、カアバ神殿には数多くの神像が奉納されていたが、630年のメッカ征服・偶像破壊によって、唯一の神<sup>アッラー</sup>に捧げられた神の館とされて以降、イスラム教徒の尊崇を集めた。仏像を見えなくすれば神像なきカアバ神殿と同様、偶像崇拜を回避できるという理由で、あるいは舍衛婦人が一光三尊像に対してマホメットのごとき偶像破壊をする気になれなかったため、代替措置として本尊厨子を納めた宮殿に御戸帳が懸けられることになったのではなかろうか。実際にカアバ神殿や、その原型である会見の幕屋ないし宿り場（『出エジプト記』）をモデルにした可能性も指摘できる。神の館である以上、神像ならぬ本物の神がカアバ神殿のなかに住むとされるのであり、厨子内の善光寺本尊も偶像ではなく生身如来とされている。このように、善光寺信仰は、日本人にとって異質とされてきたユダヤ教、キリスト教やイスラム教といった一神教の伝統を今日まで濃厚に伝えてきたのである。

## 参考文献

- Gillman, I. and H-J. Klimkeit 1999, *Christians in Asia before 1500*, Curzon Press.
- Mccallister, James William, Jr. （阿部周一）2011「『お水取り』と『長屋王』」  
<http://www2.ocn.ne.jp/~jamesmac/body473.html> 2015年4月26日最終更新を閲覧
- Péridès, S., tr. by Abdulmesih BarAbraham 1907 “The Diocese of Amida,” C. G. Herbermann et al. eds.  
1907 *The Catholic Encyclopedia Vol. I*, Robert Appleton.  
<<http://www.newadvent.org/cathen/01429c.htm>>
- Wicks, R. S. 1992, *Money, Markets, and Trade in Early Southeast Asia: the Development of Indigenous Monetary Systems to AD 1400*, Ithaca.
- 青木和夫ほか校注 1989『新日本古典文学大系 12 続日本紀 一』岩波書店
- 伊東利勝 2001「綿布と旭日銀貨——ピュー、ドゥヴァーラヴァティ、扶南」『岩波講座 東南アジア史 第一巻 原史東南アジア世界』岩波書店
- 今村啓爾 2001『富本銭と謎の銀銭——貨幣誕生の真相』小学館
- 岩本裕 1965『極楽と地獄』三一新書
- 大山誠一 1999『＜聖徳太子＞の誕生』吉川弘文館  
——2001『聖徳太子と日本人』風媒社

- 河内祥輔 一九八六『古代政治史における天皇制の論理』吉川弘文館
- 川崎庸之 1982『川崎庸之歴史著作選集 第1巻 記紀万葉の世界』東京大学出版会
- 岸俊男 一九六六『日本古代政治史研究』塙書房
- 旧約聖書翻訳委員会訳 2004『旧約聖書 I 律法』岩波書店
- 久米邦武 1903『上宮太子実録』(久米邦武 1988『久米邦武歴史著作集 第一巻 聖徳太子の研究』吉川弘文館)
- 小島憲之ほか校注・訳 1996『新編日本古典文学全集 3 日本書紀②』小学館
- 1998『新編日本古典文学全集 4 日本書紀③』小学館
- 国立歴史民俗博物館編 1998『お金の不思議——貨幣の歴史学』山川出版社
- 小松英雄 2009『いろはうた——日本語史へのいざない』講談社学術文庫
- 五来重 1998『善光寺まいり』平凡社
- 坂井衡平 1969『善光寺史 上下』東京美術
- 坂本太郎 1979『聖徳太子』吉川弘文館
- 坂本太郎ほか校注 1965『日本古典文学大系 68 日本書紀 下』岩波書店
- 信越放送 2003『祈りの地へ——平成十五年善光寺前立本尊御開帳 (DVD VHS)』善光寺事務局
- 鈴木景二 1996「現地調査からみた在地の世界——近江国薬師寺領豊浦荘・興福寺領鯉江荘」、佐藤信・五味文彦編『土地と在地の世界をさぐる——古代から中世へ』山川出版社
- スチュアート, J 1979 熱田俊貞・賀川豊彦訳、佐伯好郎校訂、森安達也解題『景教東漸史——東洋の基督教』原書房
- 高田修 1967『佛像の起源』岩波書店
- 1987『仏像の誕生』岩波新書
- 寺崎保広 1991「『若扇』木簡小考」『奈良古代史論集』第2集
- 1999『長屋王』吉川弘文館
- 中田祝夫校注・訳 1995『新編日本古典文学全集 10 日本霊異記』小学館
- 長野県編 1986『長野県史 通史編 第二巻 中世一』長野県史刊行会
- 1990『長野県史 美術建築資料編 全一卷 (二) 建築 解説』長野県史刊行会
- 奈良国立文化財研究所 1995『奈良国立文化財研究所学報第 54 冊 平城京左京二条二坊・三条二坊 発掘調査報告——長屋王邸・藤原麻呂邸の調査 本文編』
- 日本聖書学研究所編 1976『聖書外典偽典 7 新約外典 2』教文館
- 文化財建造物保存技術協会編 1999『国宝善光寺本堂保存修理工事報告書』善光寺
- 以下は、参照箇所を一々明示しない
- 平山朝治 2009a『平山朝治著作集 第3巻 貨幣と市民社会の起源』中央経済社
- 2009b『同 第5巻 天皇制を読み解く』中央経済社、「長屋王の聖徳太子」「光明皇后と鑑真の聖徳太子」